

## 新しい指定文化財の紹介 ～ 浄土三部経曼荼羅 ～

平成 31 年 3 月 7 日に開催された教育委員会において、明星地区の轉輪寺が所蔵する「浄土三部経曼荼羅」が新たに町指定文化財（有形文化財 絵画）に指定されました。

三部経曼荼羅とは、浄土教の根本経典である「仏説観無量寿経」・「仏説無量寿経」・「仏説阿弥陀経」の三経典をわかりやすく布教するために、絵図でしめしたものです。今回の指定では制作時期は異なるものの、三部経の曼荼羅全てが良好な保存状態で轉輪寺に伝来したことが評価されました。

### かんむりょうじゅきょうまんだら ◎ 観無量寿経曼荼羅 (絹本着色)

タテ 183.2cm × ヨコ 154.6cm  
(ただし、描表装のため、表具込法量は 295.0cm × 187.8cm)

観無量寿経曼荼羅とは、いずれの行もおよびがたい罪惡の凡夫でも、南無阿弥陀仏と念仏を唱えれば極楽浄土に往生できるという観無量寿経の教えを示している仏画です。

本図では、菩薩をはじめ仏たちには金彩を多用し、金泥を塗った上に、細かい文様までさらに細かい金泥で描かれ、華やかで細緻な作りとなっています。表装部分も、法輪などの仏具を絵で表現する「描表装」と呼ばれる手法が用いられています。

表具下部には金泥で、天和 3 年（1683）に「明星山本教寺現住沙門」（轉輪寺三世の信海上人）の発願で制作され、翌貞享元年（1684）に完成したことが記されています。本教寺とは元禄 15 年（1702）に轉輪寺と改称される以前の寺号です。

また表具部分の右側には金泥で制作に関係した結縁法名が多数記されており、多くの檀信徒によって、この曼荼羅が制作されたと思われます。



むりょうじゅきょうまんだら  
 ◎ 無量寿経曼荼羅 (絹本着色)

タテ 213.2cm × ヨコ 160.3cm

阿弥陀三尊を中心とした極楽の様子が中央に描かれ、  
 周囲には、無常・地獄などの諸相が描かれています。

画面左下の貼紙に「望月富文画」と名が記されています。富文に関わる詳細な情報は不明ですが、轉輪寺所蔵の「八相涅槃図」(明和3年(1766))に、「京師望月富文」  
 と記されています。また、東京品川の大龍寺に丸屋福岡八兵衛が宝暦13年(1763)に奉納した大涅槃図にも「望月斎富文」の名前が確認されています。こうしたことから、望月富文は京師の絵師として、宝暦年間(1751-64)から明和年間(1764-72)頃に、仏画制作を中心に活躍したとみられます。なお、明和町平尾にも「望月富文画」と記された涅槃図が確認されています。

図様は、富文の考案ではなく、近江国の絵師高田敬輔(1674-1755)による「無量寿経曼荼羅」を基に描かれている点が注目されます。本図左下には、正徳4年(1714)に敬輔が、知恩院の義山良照の指導の下、無量寿経を形容した曼荼羅を制作し、延享2年(1745)に、幕府の許しを受けて版刻されたことが記されています。望月富文は、明和年間(1764-72)頃に、20年ほど前に版刻された敬輔の図様を基にして、若干の改変を加えながら制作したと考えられます。

あみだきょうまんだら  
 ◎ 阿弥陀経曼荼羅 (絹本着色)

タテ 136.1cm × ヨコ 93.2cm

(ただし表具に結縁法名あり表具込法量 224.0cm × 106.0cm)

極楽浄土や阿弥陀仏などの姿を描いています。表具一文字部分に銘文があり、明和7年(1770)に轉輪寺住持第七世教娑(1695-1776)、第八世教諦(1710-89)の発願であることが記されています。表具風帯と中廻し、柱部分は「描表装」で、蓮台の上に法名が記され、結縁法名とみられます。赤字と黒字の表記があり、存命者と物故者を書き分けているようです。旧版『明和町史』では「京師望月富文筆」としており、現段階では根拠が明らかでないものの、年代的にも筆法においても富文筆の可能性がります。

